

雨傘を抱えて空調機械室の扉は雨水色の重力に満たされる。リサイクル方式の定期券は全ての生徒の怠惰と未知への友愛を引き取り、三三〇一教室に紛れ込んだエイリアンと交信している。その間に六月の分解を待つ人工物達は調理され、残されたレモンの香りは遠く、ある箱式石棺まで惨事を伝えたはずである。セハノールSSーーの霧を眠たげに塗り広げたくもりまなこの少年少女は沈黙の横を天使の白い石畳のみを選び取つて遠慮深く歩いていく。ただ一つを踏み外した少年、少女は窓を開けるには鋭すぎる爪で浮かぶ手に法則を取り戻し静謐と安全の保持は片足で守護される。彼女が彼女を着がえるとき夕陽よりも高い音で鍵の音は響きわたり、壁の展示は六世紀よりも数刻前の曇天に飾られるだろう。

あした、世界が終わるらしい。ネットがそう言つて、テレビが乗つかつて、みんなみんな、あした世界が終わると思つてる。ざわざわ、バタバタ。心が、小さくなる気がした。だから、海を見に行くことにした。

すう、はあ。ひとりぼっちと、ひとのいない海。

ph。 ひとつみとは、近い値だ。

すう、はあ。ひとりぼっちと、ひとりじゃない海。かあ、かあ。カラスはまだ鳴けるみたいだ。

ねえ、知つてる？ あした世界が終わること。

うみいろとは言わない、水色の景色。

水面はキラキラ輝いて、今日も明日も知らん顔。

ねえ、聞いてる？ 誰にも会わないのつて母が言つた。そらいろとは言える、空色の景色。

太陽はギラギラ輝いて、今日も明日も我が物顔。

熱された砂粒は、珊瑚の夢を見るらしい。

ねえ、聞きたい？ あした世界が終わること。ひとだけが、それを事前に知りたがる。

すう、はあ。ひとりぼっちと、人じやない海。すう、はあ。知りたがらない、うみのにおいだ。

此処は私のいたといへ

岡田円加

「扉閉まります。お手元をお引かへだせ。扉閉まります。」

「本日は、丸西浄東線を^ご利用いただきました誠に、ありがとうございます。」
「この電車は特急『ふだらく』行きです。『ふだらく』行きです。」
「本日、『やあやあや』駅間による交通調整のため四分ほど遅れて発車してお
ります。お客様に^い迷惑をお掛けしました^い、大変申し訳^いやせん。」

「次は、『かたせ』。次は、『かたせ』。」

「『やあやあや』へお越しのお客様はお乗り換えです。(We will soon arrive
but anywhere. Please change here for somewhere line.)」

「『かたせ』。『かたせ』。お出口は右側です。(The station is a line. The door
on the right side will open.)」

「足元に^い注意^くだせ。お出口です。足元に^い注意^くだせ。お出口です。」

「底は水深三センチメンタルのやねやがなの^いしなつております。三つ
目でいる咽びばかりの小さなマグロの眼窩は、大変落ち込みやすくなつてお
ります。お通りの際はくれぐれも^い自愛^くだせ。」

「扉閉まります。飛び込み降車はおやめください。扉閉まります。」

「次は『いせこ』。次は『いせこ』。お出口は左側です。」

「お客様へお知らせします。包装後茫漠した加熱食品は、こちらでお取り扱いできません。ご気分の憂う方は係員にお申し付けください。」

「急停車します。お掴まりください。急停車します。急停車します。」

「お客様にお知らせします。先程、車内に呼吸が検知されました。確認作業を行わせていただきます。お時間お掛けし大変申し訳ございません。」

「確認が終わりました。ただいまより、『現在』『現在』に動きます。お出口は頭上先です。」

揺らめく雲に 描く雨は
アメノホシが 搖らいでる
欠けた水面に陽を隠し
鳥と共に 空を喰む

白い夜に身を包み

夕暮れと聴く 古竜の囁き
悠久の石に隠れた痕では
モノクロームは 檻の外

願いを込めて吹きましよう、
最果てに行き着く前に。

水銀燈が 亂反射する
誰も居ない 迷路の中で
崩れた魔法は 永遠に
詩人の唄では 戻らない

揺蕩う光を 謎つてる
澄んだ花びらの 冒險で
独りぼっちで咲いた時
アメノホシが 晴れ渡る

煌夜はもう終わらないから。

夜の帳が降りる前、貴方だけに伝えます。

傳く 野薔薇は 架け橋に
幻想演奏家が躊躇つて
胸元で 蝶番を 抱きしめる
漂う香りの 理の中

時の愁いを 蒔いている
水鳥が辿る 白昼霧の間まにま
住処に帰る 宴の音色は
アメノホシのまなざしに
涙のペンダントを王冠に変えて、
そう願つて いるから。

蝙蝠傘で アメノホシ
光になって 消えてゆく
風見鶲たちは眩しくて
ゆらゆらモビール 摆らしててる

アメノホシが奏では
幾千光年の グロッケンシュピール
翠の妖精 空高く
夢見の蜥蜴は 彗星へ

ふたつめの月は見えて いますか?
取り残されないで。

崩れた夜

小宮実紗

私を好きだという人は全員どうかしているの。
彼はとびきりどうかしているの。

触れてみたくなる冷たい頬の骨。

春の夢の中で、そう思う。

昼の熱を知らない朝霞と水の匂い。

儚い現実で、そう思う。

食パンとチーズと牛乳、そしてスーツを着た彼。

特別な、鼓膜にこびりついた生活の、風景。

薬八錠と水と唾液。そして夜が少しだけ早く進む魔法のパジャマ。

いつもの、愛と呪いと祈りの、風景。

夜が崩れるたび明け方が遠くなっていく。

静かな夜。冷蔵庫のうなる声が聞こえる。

虫一匹すら殺したことがなきそなな無垢な顔をして肉を喰らう彼が、見た
い。

コンクリートの廊下。赤子のように重たく沈んだ私を彼はただ見下ろしてい
た。

睫毛に縁取られた瞳は水の膜を張つていて、こちらを真つ直ぐ見る視線は生
の気配しか感じなかつた。死なないことが特技だと信じて疑わなかつたの
に。

彼は肉ではなくて、私の心を喰らうことしか出来なくなつていた。

騒がしい夜。私のうなる声が五月蠅い。

私の隣で少しづつ歩き方が変わっていく彼を、知っている。

白塗りの部屋。彼が激しく咳き込むたび、空間が桜色の泡で充満していく。泡はとても小さく、柔らかく、壊れやすく、それなのに何よりもしぶとく私の肺に絡みついた。

壁のひび割れが夜を飲み込んでしまえばいいのに。

月明かりが脈打つ臓器に変わればいいのに。

ベッドの縁にしがみつき、崩れていく彼の呼吸のリズムを数えていた。影と影が絡み合い、壁を撫でて、徐々に輪郭が薄くなっていく。

私を好きだという人は全員どうかしていたの。

彼はとびきりどうかしていたの。

私だつて、どうにかなりたかつた。

幕引きに伝う厭惡と愛惜

鈴木優花

ありふれた夏の夜、ポストに返されていた合鍵
貴方にあげた私の気持ち全てが丸ごと返された
終焉が季節外れに私の体温を下げた

私のことなんて忘れなよ、だなんて
心にも無い言葉を贈ったのは

今さら戻れないから

泣かないでよ、後悔なんてしても虚しいだけ

最後に聞いた貴方の声

私は言葉の限り拒絶を並べ、袂を分かつた
最後すら愛の扱い方を間違えていた

スマートフォンのキーボードにRを打つと

今でも入力候補に表示される、何より愛しかつた響き
もう必要のない文字列

でも、どうしてか消したくなかった

気づけば消えていた炎、すでに灰になっていたらしい
私の隣を選んでくれなかつた貴方の
ありとあらゆる不幸を望んだ

最期まで消えない呪いを残してあげようと
連絡先を開いては閉じて、言葉を選んでは消して

私以外を生きる貴方の幸せなんて願いたくないのに
何故か貴方の笑顔を想像してしまったの

自分の感情の居場所と貴方の言葉との狭間で
いつだって苦しんでいた私
だけど心はいつでもあなたの元にいた

共に過ごした一年で私の黒髪は随分伸びた
貴方だけが知っていた夜の濡れた長い髪
もう、ほかの人に何度も触れさせてしまった
貴方が独占していた私のすべて

僥く輪郭を失つてゆく

季節の一巡に結びつく私と貴方の足跡

また、四季の巡りにかけて遠く彼方へ去つてゆく

高速道路の上を走る車の中
車窓から空を見上げると
ぽつかり 月が浮かんでいた

ただの月――

でもそれをぼんやり眺めていると
ふと思い出した

父さんが昔 教えてくれた

「月はチーズでできているんだぞ」
そうだチーズを食べに月へ行こう
車はどんどんスピードを上げていく
前へ 前へ 突き進む

そして ふわりと宙に浮かんだ

車は離陸した

車はロケットとなりぐんぐん上昇する
月にはどんなチーズがあるのだろう

モツツアレラ、エメンタールにマスカルポーネ
カマンベールにゴルゴンゾーラ、ブルーチーズとリコッタだ
どんなチーズも楽しみさ

ロケットは月に突き刺さり着陸した

僕は月へ降り立ち

さつそく月を食べた

月はグリーンチーズの味がした

やわらかくて 少しうつぱい

それでいて やさしい味

僕は一生懸命 月を削つて

クラッカーにのせ

ピザにのせ

グラタンにかけて

ひたすら食べた

月の穴から

ネズミたちがぞろぞろと出てきた

たくさんのネズミが

チーズを運んで お祭り騒ぎ

それをぼくはチーズを食べながら見ていると

ネズミたちに見つかった

ネズミはぼくを取り囲み激しく怒った

チーズを取られると思つたらしい

いっぱいあるからいいじやないかと思ひながらも

ぼくは慌ててロケットに乗り込んだ

ネズミはロケットにかじりつく

ロケットは地球に向かつて飛び出した

ふつと スピードが落ちた

窓の外には

高速道路の街灯が流れていた

運転席の父さんが

「ほら、もうすぐ着くぞ」と笑つた

車にはチーズのにおいが漂い

口の中に残るチーズの味を

忘れられずにいた

銀河の中心を見に南半球へ行く

わたしは僻地へ向かうサンデードライバー
アクセルを踏み込むと枠組みが前進するのとは裏腹に
中身は数ミリ置いて行かれてしまった

いくら瞬きを繰り返しても

オンボロ車はスーパーカーにはならないし
アスファルトは草原にはならない
痺れを切らして降りてみるとなんと
脳みそが空に引っ張られて
私の体から離脱していつてしまつた

近日の暑さでそれは茹で上がつていたし
からつぽの頭で別に必要ないかも知れないと思つたことを
わたしは情けないと思つた

中に戻ると冷房をかけすぎていることに気づいた
目を閉じ深呼吸をして

後戻りできない車のアクセルを再び踏んだ
車にはナビがついていないが
好きな音楽が鳴つている、そんな諦念を
わたしは情けないと思つた

朝五時、玄関のドアが軋む音をわたしは目を覚まして聞いている。リビングのテーブルには昨日の夜の残り物がラップをかけておかれている。朝七時、母のオレンジ色のビブスは汗でぐつしょり濡れている。手に握られたビラの束には排外主義と国粹主義の俗悪な文字が踊っている。見知らぬ通行人にペコペコ頭をさげては無視されつづける母のまえを、わたしは見知らぬ通行人として通り過ぎる。そのとき、母とわたしは赤の他人同士になる。

ヨーコ

おまえは太陽みたく明るい子に育つようにヨーコと名付けられたのだ

おまえは陽子であり妖子である

午睡する私を見下ろすおまえの口元には不敵な微笑

私のなかにあやしいものをよびますおまえ

ヨーコ おまえは溶固であり容子である

おまえは流れつつ固まる凝固質の流体

おまえはひとつのかなで風景である

ヨーコ おまえは幼子であり養子である

ただいちどしか語られることのない寓話であるおまえ

横であり縦であり無限の拡がりをもつカルテジアン座標であるおまえ

座標軸のなかに斜線をひくとその裂け目から生まれた

それが私である

たくさん的人が知っていること

青い海があつて、白い砂浜があつて、

独特的の伝統と歴史があつて、アメリカみたいな雰囲気もある

あの小さい島のきれいなところ

黒いところは生活の隙間に隠された

しようがない

戦闘機が落ちて、多くの子どもが死んだけど、

小さい女の子は3人の軍人さんにおそわれたけど、

彼女たちは抵抗できないまま殺されたけど、

しようがない

戦闘機の大きな音は気にもとめないぐらい日常になつたし、

わたしの叔父は基地の中のコックさんだ

コザの夜は休みの軍人さんでにぎわい、当然みたいにホテルに誘われる

知られないままのわるいことと強調されるいいところ

わたしは知つているけど見ないふりが上手なので

だつて、しようがない

きっと何も変わらないし、もうずっとこれがわたしの日常だから

向こうの方がきっと あなたのためになるわ

従順な少年は

生命線のような坂道を

一本 二本 三本超えて

ようやくたどり着いたのは

修羅の門

鴨はまだ来ない

今のうち 帰れるのは 今のうち

帰れ

その刹那 少年の脳は 麻酔にかけられて
気づけば足を踏み入れている 修羅

藍色の袈裟にくるまれた 自信のなさそうな少年は
もう 気が抜けてしまった
向こうにいる少女たちは 少年を鼓舞して
まだ 人間らしさに溢れている

鴨が来た

鴨がどうした

鴨には 一筋の道理もない

鴨は幼い娘がいるのに煙草を吸う

鴨は煙草が足りなくなるとすぐに修羅からいなくなる

鴨にとって弱いものをいじめることは煙草を吸うことと同じ

鴨には罪の意識がない

鴨を特別にさせるものは 本当は何もない

修羅に響く 鴨の唸り

修羅に響く 少年少女の叫び

修羅に響く 竹の弾み

修羅に響く 少年の名前

ただ絶叫する少年

鴨は決して満足しない

少年は真っすぐに その目を見る

しなる腕 地鳴る足 少年の阿鼻叫喚
鴨によって完全に覆いつくされた修羅
少年と少女を失った人間たち

しなる腕 地鳴る足 人間たちの阿鼻叫喚

心を一つに修羅を作る

心を一つに修羅になる

共生的アローン（経路からの知らせ）

清水葵衣

23区内で目的地の最寄りに降りるのは腑に落ちないから飯田橋から川を伝つた。

無線イヤホンから流した渋谷系のおかげで私の白い日傘はご機嫌！ビル風にあおられながら上下に揺れている。

紺の墨がほとはしる

その墨は星の子で、ときには人をぎゅっと苦しめる

人工的な緑地や、ふと迷い込む静かな住宅地に、どこか好きで騙されているふしがある。だつて本物なんて知らないもの。ベッドタウン出身の何が悪い？ 地方つておかしな言葉じやない？

君はそうして生み出されて、やはり真っすぐ見つめる

嫌になりはしない

きっとしばらくはこの宇宙の中

広い道路の反対側で、姿勢よく並走するもう一人がいた。

左右盲だから、どちらが逆走なのかを知らない。縦列駐車だつてうまくできない。

次見たときにはいなくなつていたもう一人のことを思いながら、知りもしないし馴染みもない道をゆくのです。

それでどうしてか私は、いつだつて元気になるのです。

君は孤独を大切に抱えていて

それはおそらく生命線だから
手放さなくていいのだ

建物ばかりの場所ではおどる日傘の出番はなくて、汗のにじむ手のひらにたたまれて収まるばかりになってしまった。私も影にすっぽり収まつた。ひんやりとしたセイロンティーを身体はぐんぐん吸収する。おいしいお茶の魔法に何度も何度も助けられている。

融合と分離を繰り返して、暗闇が見つけられたり、作られたりする
そうしてあるとき小さな破裂音がして
よりよくなつてゆく不思議

良いものをたくさん見た。それはとても大きくて赤い絵。楓が描かれた屏風。
きめの細かいレース。派手な女に何かを解説する純朴な男。演歌歌手のグッズ列。作品がぶら下がるアトリエ。小さな段差につまずく自分。
明日のために、足を上げて眠つた。
優しい人が夢に出た。いい目覚めだつた。

目まぐるしく変化する関係のなかで、人々は、
そつと他人のためにはたらき、再び孤独に寄りかかる
上手に他人を愛して、やがて寂しさを求める

ごく正しいサイクルは人々を悩ませて
その中心は人々を笑う
その折々で人々も笑う
ごく正しいサイクルが人々を、
潤して、ずっと新しくするときに
他人と純に相対させるときに

なんにもならない

簾内離回

あのひとはしじんのおんがくを愛した
かぜのね むしのこえ とりのうた
いつからか ひとのおんがくばかりきいていた
はげしいおとにふきがれて せみのきげびもとどかない

あのひとはおかあさんのべんとうを愛した
おきにいりは とくだいサイズのてりやきチキンサンド
それをつくれるひとはもういなけれど
わたしのべんとうも いつもおいしいと いつてくれた

あのひとはふたりのじかんを愛した
そのしあわせには いくらことばをつらねてもたりない
いつしか おはよう さえかわさなくなつた
けれど わたしにそれをうらむことは できない

そしてあのひとはたびにでた
どこへいったというのか 愛したものをおきざりにして
すてられるわけがないでしよう
わたしがもつていたつて なんにもならないけれど

数多の星々の廻天も終わり
空には落ちる流星のみとなつたころ

大気には兄弟の血と

逆行する憐憫のみ彷徨う

降り積もる青銅の鐘の音に

私は辟易していた

太陽の吠える声のみが木靈する

【虚妄】は盲目の男どもに片方の乳房を抉られた
彼女の騙りに火を背負つた巨人が死んだからだ
男どもの髪は先のちじれたところから燃え
やがては塵となつた

西方からなだれこむ熱を帯びた風に呑まれ
その耳障りな音が息をひそめたとき

彼女は【真実】を殺して皮を剥いだ

逃れたかつたのでも

疑われたかつたのでも

殺されたかつたのでもない

ただ愛してほしかつたのだ

【虚妄】が【真実】を騙り近づくと

哲学者は言葉なく

撫でる柔らかな春風よりもそつと

ただ彼女を抱きしめ

幾度の逢瀬を経たあとかのような
深く熱い

息はうだり流れを淀ませ
舌は蛇となり貪るような
そんな口づけを突き付けた
きつとこのときだろう

太陽が一瞥をくれたのは
月は彼の虹彩だと忘れてはならない

五番目に燃やされたのは【女】だった
彼女はときに

女神であり
偶像であり

femme fatale であった
彼女の瞳は質の悪い鏡
見たものは際限なく騎つた
四肢はやけに透き通り
ひとたび触れられたのなら
言の葉を失つてしまう

呪われた義眼に魂を喰われ

睾丸に脳を敷き詰めた愚かな獣どもの手綱を取り
星を思うままに振り回した

あるときは太陽に股を開き

【死】と【欲望】と【虚妄】と【盜賊】を産んだこともあつた
ああなんたる不遜か
私は決して彼女を許すことなどできない

太陽はまず彼女を炉に放り込んだ
ガラス質の肌が少し溶け

黄金の輪郭が歪み始めたころ

炉は鏡となり

その醜態を彼女に吐露した

太陽は彼女の滑らかな嬌声に身を震わせ

彼女の子宮を卵巢から半世紀ほどかけて燃やす

一際艶やかなアルトサクソフォンの響きに

【死】と【男】はさびた鉛の突起を震わせ

その灰を求めて太陽に懇願する

【男】は仰々しい態度で礼賛の歌を垂れ流し

太陽をたばかつた

灰はただ厳かに剣を磨くためにある

七十二番目に燃やされたのは【知識】だつた

彼は病を癒した

ただ癒した

医学で癒した

数学で癒した

万有引力で癒した

核分裂で癒した

病が癒える度に人は自らの無知を知つた

知ることは酒だつた

しかし不幸の汽笛が耳から離れなくなつたのだと

無知なる幸福は腐敗の匂いを漂わせ

人々の器は光よりも速く浸食した

私は彼を愛していた

人間は不幸でなくてはならない

太陽は彼の四肢を引きちぎり薪にくべた

そして問うた

なぜこれは燃えているのかと

なぜ燃えなければならなかつたのかと

【知識】は科学する

そのたくましい脳で学問する

回路に艶やかな鮮血が注がれ

寄せては返す波のように

勢力を増し真理を希求する

歴史上類を見ない偉業に城壁は悲鳴を上げた

過剰な熱で溶けて爛れた

彼のことだ

垂らした血も運河となり

また星雲の淀みを反響させるのだろう

三千七百八十二番目に燃やされたのは【男】だつた

彼は騒ぐのが好きだつた

【弱さ】を鬻つて遊んだ

指を輪切りにして

そのたびに塩に浸した鑪で肉を削つた

悲鳴が彼の嗜好品だつた

ゴールドのネックレスを三重に

シルバーのネックレスをさらに四重にしていたので

頸椎が変形してテトラポットのようだ

嘲笑が洪水をおこし

天井を翻して大雨を降らせたこともあつた

子供の涙を水銀に変えて殺した

溺れた老輩の足に楔を突き立てて殺した

女は髪を膣に詰め込んで背骨をひん曲げて殺した

先に皮がはがれて死ぬのもいた

私は彼を嘲った

これほど哀れな人形劇

他では見られまい

太陽は彼の身にまとう装飾を引きはがした
なんたることか

肥え太った蛆虫が筋肉となり這う
いつからか彼は空洞だった

ペニスは薄汚れた外套がその身を離さず
ナナフシの群体とさほど違ひはない
彼は鏡をもつていなかつた

湯を沸かす薪も持つていなかつた
私は初めて太陽にお声がけした

灰も残してはなりませぬ

太陽はコロナを滾らせて応えて下さる
プロミネンスとフレアで交互に燃やした
灰の溶けたその空気さえ闇に消えた

明日燃えるのは私だろう
ただ銀の風が郷愁を誘う

いのちの好き嫌い

田原悠輝

アリが歩いていた

手で押してみた

身体をよじりじたばたしている

手には虫眼鏡

聖なる光が一点にあつまる

黒を焼き尽くす

白い煙と焦げたにおい

玄関にゼリーを食べている黒い虫がいた

凜々しい角が2本生えている

手には霧吹き

土が水をふくむ

ああ

長生きしてくれよ

七夕の夜

青木陽菜

星の数だけ願いがあるなら
願いの数だけ星がある

この世界はいつも誰かの思い通り
雨が降らなきや緑は枯れる

笑う子どもの叫び声

輝くあいつらの汚い汗

緑に謝れ奪うしか脳のない人工物め
ああ、

何がいけないんだとがなる声が聞こえた

拍手もブーイングも遠くから見れば同じだと知った
スピードを上げるあの列車にブレーキはない
止めようとして殴ってとつぐに折れた後
そうか、

こんなにたくさんメニュー

神様は頼み過ぎたな

味が喧嘩してものはやおいしくない

なんで同じタイミングで口に運びましたか？
フォークもナイフもスプーンも箸も手に負えない
なるほど。

今夜は星が多すぎるようです

こんなに眩しくちゃ

カササギも目がくらんで飛べやしないよ

恋人の子宮

紀卿

温かな子宮、生臭い羊水。

揺られ、眠り、

僕は君の子になつた。

そしてへその緒を通じて、
宿り虫のように

君の養分をむさぼる。

ああ、それが、僕——

醜く、哀れな僕。

僕は君のすべてを知つていた。
ぬめる内膜の感触、

腸がうねる音、心臓の鼓動、
もやに包まれた子宮の闇。

でも、本当は何も知らなかつた。

君の顔も、膚も、腹も、
脚も、髪も、乳房も。

僕は何ひとつ知らなかつた。

こんな僕は、やっぱり君の子にはなれないよね。

だから、殺してくれ。

潰して、絞つて、引きさいて、

僕をぐちやぐちやにして、

骨まで、肉まで、魂まで。

へその緒なんていらない。
ぬくもりなんて偽りだ。
愛なんて嘘つぱちだ。

僕を潰して、

ぐちやぐちやに潰して、
もう一度子宮に戻して、
血と羊水と一緒に、流してくれ。
もう何もいらない。
顔も声も、誰の子でもなくていい。
ただの塊でいい。

君の中の

黒くてぬるい穴に
沈めてくれ。

全部、終わらせて。

君の子宮ごと、僕を終わらせて。

「プールに行こう」

父はそう言つて、車を家の前に停めて私たちを呼んだ
ショッピングセンターの服屋に水着が並ぶ頃
我が家では「泳ぎたい」が口癖になつていた

8月には花火が上がる川沿いを下る

川は瞬きを繰り返し、やわらかな風は頬と手を撫でた
白く、くつきりとした雲が浮かんでいた

車内では、父と私だけが起きていた

景色を目に焼き付けようとしていた 父の頭に雲が見えた

来年には自由にプールに行けないと知つていた

恋心を教えてくれた大学生を思い浮かべながら、隣で眠る弟の横顔を眺めて
いた

「楽しい？」と問いかける父に、笑顔で頷いた

私はまだ少女

頭上にはやわらかな雲が広がつていた

重い物音には心臓が跳ねる

あの時のことが繰り返されると思つて
床に踵を蹴り下ろしたような音がして
祖父は浴室で倒れたのだ

気を失うでもなく血が出るわけでもなく
脳が損傷を負った人間のうめき声が響いた

私たちが素直に知覚することはできなくなつた

バタン、と冷蔵庫が閉められる
ガシャン、と便座が下ろされる
ドスン、と祖父がソファに座る
祖父の姿を確認して胸を撫でおろす

生きていてほしいからなんだ

聞こえなければ

冷たくなつた祖父が転がっているかもしれない

体はもはや意思と切り離されているのに
些細なことで生死が決まるのに

無数の罠であふれているのに

祖父の世界は今この瞬間と遠い過去の記憶だけだ

物音もなにも聞きたくない

疲れてしまつた

苦しむ祖父も見たくない

元気になつてくれないかな

願つてしまつた

見えないところで

聞こえないところで

で、くれないかな

久しぶりにあの子に会った

前はどこか暗い目をして
ぜんぶぜんぶなげやりで
とりあえず怒られないようほどほどにやつてたあの子が
目には光があつて
やりたいとおもつてることをしゃべって
そのためだけに勉強もすごくしだして
まるで別人みたいになつてた

ものすごく ものすごく びっくりした
あんなにキラキラした目で
あんなに楽しそうにしているあの子をみたのは
いつたいつぶりだろう

そういうえば背も高くなつてる

前会つたときはおんなんじくらいだつた気がする
今あの子は私が知つてあるあの子より背が高い
並んでみたら思つたより差があつた

うれしいような 悔しいような なんとなく複雑な気持ちになつた
なんとなくとなりのあの子を見てみたら

あの子の顔は どこか見覚えのある得意げな顔をしてた
その顔をみたら なんだか複雑な気持ちがスゥーと消えて

私は思わずしゃがんで 下からまだ得意げにしてるあの子の顔を見て

「うわあ 背がたかあい」 つて言っていた そうすると
やつぱりどこか見覚えのあるあの子の得意げな顔がもつと得意げになつた
それをみて思わず笑うと
あの子はやつぱり私の知つてゐるふしぎそうな顔をした

オリジナルチキン

福田椿

私、チキンを焼ける身分になつて、
私、一生あなたに心を開かない。

私が作った加工食品だけで生きて

勝負にめっぽう弱い

「ダイスカット」くん。ミックスベジタブル
野菜は絶対、洗剤で洗う。

すくなくとも、

川の生き物にとつて、加害である。

それでも死なないで。

決して知らないで。

それでも知つてほしかつた

私のほんとうのことを

私、私の顔が一番好きだけど、

あなたは、一生

私のことを可愛いとは

思わない健康

思えないのね。

健康体なのでしょう。

風味づけのためなんかじやない！

オリジナル

チキン

主人格としての鶏肉は
知らず知らずのうちに、
あなたになる。

あなたを○す。

○して、カラダが置き換わる

おはよう、

滋養、

栄養、

効能、

そんなのフレーバーテキストだよ！

つて

知らないで
死なないで。

もう、ぜんぶ

ぜんぶ一生知らない今まで

全て私の作ったマニュファクチャーで
体を満たして？

それっぽい形式のある××を
あなたに与え続けるから。

それでカラダを作つてね。
体の違法建築によつて、
神奈川県警に連行されても、
諦めないで。

そのカラダで生きていて。

いやもう、ちょっと無理だとは思うけど、
いつか私にちようだいね。

あなた、

社会的に、生産性のある身分になつたというが、
消費するだけの少女に成り下がつた殿方の
体カラダ

は、むしろモノのよう。

嘘でもいい

遺棄をしよう。

海の生き物にとつて、加害である。

るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる

つまらないしりとりは
やめてください。

ねえもう、やめたほうが
よかつたのかも。

知らない体を好きになる。ことを
許してね。

だつて、あなた

明日には知らない人。

かつて人間だつた蛙カエルだつて、
鶏肉チキンと同じなんでしょ
きっと、誰も気づかない。

春、

あなたの善行に対する罪を厳罰化する

見せない、一生

私のほんとうのことは、知つてしまつて欲しいような
でも、死なないでほしい。

ようやく見つけた

健康な体

生きててね。

※「る」の羅列は草野心平『春殖』から